

六ツ美南部を切り拓いた人々

氏名	生存年	居住地	業績
平井要造	1840～1904	中村町	占部村長
堀内善次郎	1843～1892	高畑町	高畑村戸長、中島学校長
鶴田勝蔵	1843～1910	中島町後屋敷	耕地整理、安藤川改修、西尾鉄道
鍋田恒雄	1848～1931	中島町本町	耕地整理、西尾鉄道
杉浦藤助	1851～1925	中島中町	村会議員、耕地整理、悠紀斎田
早川龍介	1853～1933	中島中町	衆議院議員、耕地整理、高橋用水
杉浦定吉	1854～1910	安藤町	安藤川改修
加藤小兵	1854～1897	上羽角町	最明流煙火、西尾市上羽角町
野本芳三郎	1861～1945	正名町	占部村長、六ツ美村長
早川治三郎	1864～1924	中島中町	耕地整理、悠紀斎田
野々山卯三郎	1866～1929	中村町	安藤川改修、悠紀斎田
石川成章	1872～1945	中島町本町	地質学者、京都帝国大学講師
足立俊次郎	1875～没年不詳	中島町本町	薬剤師、足立病院
松村松僊	1877～1940	中島町	悠紀斎田お田植えの絵
加藤長之助	1887～1942	上羽角町	最明流煙火、西尾市上羽角町
鋤柄正平	1893～没年不詳	中島町上町	薬剤師、東京出店

[平井要造（1840～1904）]

平井要造（ひらい ようぞう）は占部村（1889（明治22）年～1906（明治39）年）の初代村長であった。要造の業績は、多くの人々から認められている。そのことを示す「平井要造翁頒徳碑」（1916（大正5）年建立）が、中村町の占部天神社の境内にある。要造は1840（天保11）年6月20日に生まれ、温厚で、人情に厚く、誠実で、仁義に重い人柄であった。1862（文久2）年5月に百姓代となり、1868（明治初）年には組頭となり、その後庄屋となった。庄屋・組頭・百姓代は当時の村政をあずかった人たちで、村方三役と呼ばれていた。庄屋は村政全般の責任者で、組頭はその補佐役、百姓代は村民の代表という性格をもっていたということである。

1874（明治6）年3月に法律が改められて中村の戸長（庄屋などの呼称を廃止して1889（明治22）年まで戸長）となった。以後、戸長を数回任じ、村会議員も務めた。そして、市町村制の公布により1889年11月に占部村長となった。ちなみに当時の占部は、現在の上三ツ木、下三ツ木、中村、国正、正名、定国、坂左右、下和田、野畑が含まれ、役場は中村にあった。要造は全35年間の公職を勤め上げ、1904（明治37）年9月6日に66歳の生涯を終えた。



占部天神社 20150728



役場記念碑 20150728



平井要造記念碑 20150728

要造が占部で活躍した時期と占部学校の設立時期が重なっていることから、要造は占部学校の設立と整備に尽力したことが推察される。占部学校は、1890（明治23）年の小学校令の改正により、1村1校設置義務となり、1892（明治25）年5月に占部村学校仮校舎修繕委員会が設置され、同年10月1日、占部村立占部尋常小学校が設立された。

【堀内善次郎（1843～1892）】

堀内善次郎（ほりうち ぜんじろう）の父、次郎作は1838（天保9）年に碧海郡高畑村の農家である堀内善兵衛の養子となり、その長女と結婚した。堀内家は代々地頭用達（知行地を与えられ租税徴収）で士格を給されていた。善次郎は天保14（1843）年12月にその家に生まれ、幼い頃より才知がすぐれ学問を好んだ。幼い頃より龍泉寺（現中島町）の僧、普翁（ふおう）に師事して学んだ。1858（安政4）年から本多氏の家臣の寺井喜雄に従って学んだ。

1872（明治5）年1月、碧海郡高畑村戸長を拝命した。1874（明治7）8月、戸長の職を辞して養成校に入学し、日々修学した。1879（明治12）年2月授業術の卒業証書を受け、1883（明治16）年2月に高等師範学科を卒業した。その後、中島、小川および三ツ木の学校に奉職し兼ねて校長に選ばれ、大いに教育に力を尽くした。



六ッ美南部小学校
堀内善次郎の碑
明治26年5月建立
20150802

中島学校は、1872（明治5）年の学制発布により1873（明治6）年8月に、下中島村（現在の中島中町）崇福寺別院を仮校舎にスタートし、1874（明治7）年3月に下中島新町の牧多守氏宅に仮校舎を移した。1882（明治15）年の県令改正により第41番小学中島学校に、1886（明治19）年の小学校令改正により第19学区中島尋常小学校に、1889（明治22）年の市町村制・翌年の小学校令改正により中島村立中島尋常小学校に校名を変更していった。学校の位置は下中島としか記録がないので、多分現在の六ッ美南部小学校の位置辺りであったのではないかと推定される。善次郎が中島学校に務めた時期は正確には不明であるが、「1880（明治13）年に私財を投じて校費を補い

木盃を受けた」という記録から、この時期に善次郎は師範学校で学びながら教職に就いていたのではないかと考えられる。丁度、1879（明治12）年に中島学校は就学児童の増加により校舎の新築願いを県知事に提出し、それが1879年7月15日に許可され、1880（明治13）年5月30日に竣工している。その時期が重なるので、中島学校の校舎新築に善次郎が献金したことが推察される。1892（明治25）年7月13日享年51歳で病死した。六ツ美村誌にその記載がある。

【鶴田勝蔵（1843～1910）】

鶴田勝蔵（つるた かつぞう）の業績としてまずあげられるのが「耕地整理」と「安藤川の改修」を成し遂げたことである。特に「耕地整理」については、1900（明治33）年に耕地整理法が公布されると、下中島村（現中島町）は全国に先駆けてこの事業に着手した。下中島耕地整理組合が設立され、事業許可申請をし、1901（明治34）年に起工、1904（明治37）年に竣工式を行なった。その中心となって活動をしたのが鶴田勝蔵であり、愛知県の耕地整理の始まりでもあった。また、勝蔵は悪水整備事業にも奔走し、六ツ美地区を「二毛作ができる水田」に整備した。このことで、米と麦、米と菜種を収穫できるようになった。菜種については、土壌が向いていたこと、品種改良されたことなどから、昭和初期には全国1の生産地となり、六ツ美の菜種は全国で有名になった。

2つ目として「軽便鉄道」に係わったことがあげられる。1910（明治43）年西尾軌道株式会社が設立されると、六ツ美から鍋田恒雄とともに参加し出資した。その結果、翌年、西尾駅と岡崎新駅との間、約13.3kmの鉄道が開通した。六ツ美南部学区では中島と占部に駅ができた。このような勝蔵の業績は、1914（大正3）年悠紀斎田に中島が選定される大きな要因となった。勝蔵のおかげで、中島は耕地整理が進み、二毛作ができるような水田になった。勝蔵はそれを目にすることはできたが、1910（明治43）年に亡くなっているため、残念ながら、西尾（軽便）鉄道（1911年）を走る蒸気機関車や盛大に行われた悠紀斎田お田植え祭り（1915年）を見ることはできなかった。そのため、悠紀斎田に選ばれた翌年、村人は故鶴田勝蔵霊前報告祭を八幡社で開いている。そこには松井愛知県知事も参列して感謝の意を表した。1906（明治39）年3月26日に藍綬褒章を受章している。六ツ美村誌、碧海郡誌にその記載がある。



鶴田勝蔵



西尾鉄道 機関車 当時



八幡社 耕地整理記念碑 明治38年建立 20150727

【鍋田恒雄（1848～1931）】

鍋田恒雄（なべた つねお）は県・村政にかかわる政治家として活躍した。1886（明治19）年1月から1903（明治36）年9月までの14年6か月間、愛知県会議員を務めた。1886（明治19）年1月、1888（明治21）年1月、1892（明治25）年10月、1894（明治27）年10月、1896（明治29）年10月、1898（明治31）年10月、1899（明治32）年9月にそれぞれ県会議員に当選した。

その後、1906（明治39）年8月、糟海（汝性寺、牧御堂、井内、宮地、赤浜、上和田）、中井（土井、中ノ郷）、占部（上三ツ木、国正、中村、下三ツ木、正名、野畑、下和田、坂左右、定国）、合歓木、青野、中島の6村が合併し六ツ美村ができると初代村長となった。参考までに、その後、六ツ美村が町制施行し、1962（昭和37）年に岡崎市に合併したときの六ツ美町長は偶然にも恒雄の孫の鍋田紀之であった。六ツ美村民は国政に於いては早川龍介で、県・村政では鍋田恒雄と連携をとってこの地区の政治を行っていたようである。

具体的な業績としては、農業を中心とした産業振興があげられる。田んぼを、馬を使って耕す

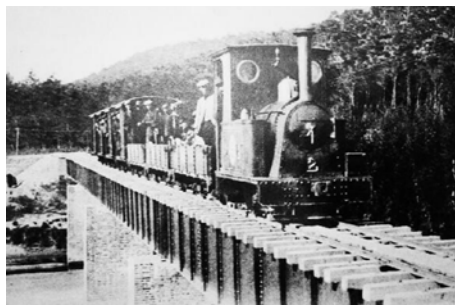
馬耕の指導者を熊本県から招聘し、これを奨励し、碧海郡での馬耕の先駆的な役割を担った。また、徳島県より藍の作付けと藍玉づくりの方法を習得しようと多田安平という人物を雇った。その他、養蚕の伝習所も設置した。このように率先して、新しい進んだ技術をこの六ツ美に導入し、多くの人々や地域のために啓蒙的な仕事をした。

耕地整理については、八幡社の記念碑にその内容の詳細が刻まれている。1900（明治33）年に耕地整理法が公布されると、この中島は、村農会長の鶴田勝蔵が、鍋田恒雄ほか26名の村会評議員を招集し、話し合ったという記録がある。その内容は、県下に耕地整理の事例がなく着手の順序や方法が分からないので、先進地の石川県や静岡県に視察をしようということであった。視察は、恒雄とともに勝蔵など5名が1900年11月に行っている。そしてその年の12月、恒雄をはじめとする発起人が決まり、1901（明治34）年5月、整理委員が選定され、恒雄は副委員長になった。これは八幡社の記念碑裏に刻まれている。ここからも耕地整理において重要な人物であったことが分かる。その後、すべての田を乾田および二毛作にし、高橋用水からの幹支線を適良にし、灌漑・排水を充分にし、耕作本支道も適所に設け、耕作上の便益を得るように目的をもって進め、1904（明治37）年に竣工した。

次に、高橋用水の整備にも尽力した。これは耕地整理と関連して進められたと想定される。高橋町の取水口にある記念碑には、恒雄の名前が発起人の一番初めに刻まれている。これは、リーダー的な存在として働いていたこと、その業績が多くの人たちから認められていたことなどを表していると思われる。最後に、西尾鉄道の開通にも関係していた。1910（明治43）年に西三軌道株式会社が西尾で起こると、それ以後も含めて何度もそれに出資し貢献している。この要因を推察するに、恒雄はもともと西尾市室町の出身であったので（明治7年に鍋田家に婿嗣子として入っている。）、西尾の人々とのつながりがあったと考えられる。また、西尾鉄道の路線周辺は鍋田家の土地が多くあったとも考えられる。



鍋田恒雄



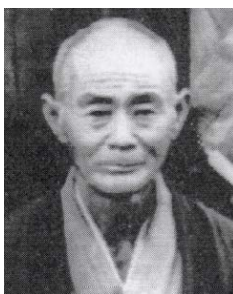
西尾鉄道 機関車 当時



八幡社 耕地整理記念碑 明治38年建立 20150727

〔杉浦藤助（1851～1925）〕

杉浦製糸所の創始者である杉浦藤助（すぎうら とうすけ）は、この製糸業だけを行っていたわけではなく、この地域の色々な事にもかかわっていた。まず、1900（明治33）年から始まった中島の耕地整理の事業に加わっていた。その名前が八幡社の記念碑に見ることができる。藤助は土地価格評定や土地割付の担当であった。



杉浦藤助



崇福寺 杉浦家の墓 20150806



崇福寺 20150806

また、1915（大正4）年の悠紀斎田お田植え祭りには六ツ美村会議員として悠紀斎田奉賛会役員（実質的な事業の執行委員）に選ばれ、接待部の委員としての仕事をしていた。杉浦製糸所という個人の事業が成功していたことから、この地域の事業の色々な役に就き、貢献していたことが分かる。崇福寺には杉浦家の墓が建てられているが、その大きさは当時の杉浦家の繁栄を物語っているようである。



妙安寺 20150815



妙安寺 杉浦家の墓 20150815

〔早川龍介（1853～1933）〕

早川家は旗本小笠原伊勢守の代官であった。早川龍介（はやかわ りゅうすけ）は士族の家に生まれ、16才の時、明治維新になり、静岡の藩儒、宮原寺三郎の塾に入り、静岡大学校に通学した。27歳で県議員となり県議会副議長を務めた。1885（明治18）年に農商業視察員として渡米し、耕地整理の必要を感じたようである。その後、1890（明治23）年、37歳で第1回帝国議会の選挙で衆議院議員に当選した。そして、1920（大正9）年までに10回の当選を果たした。このように長期に渡り、県・国政を務めた人物は、明治・大正期の愛知県ではこの龍介を於いて他にはいない。それだけ国や県、そして六ツ美のために尽力し、多くの人々から信頼されていたと思われる。また、国政にかかわる中で、いくつかの文献から総理大臣を務めた伊藤博文や山縣有朋、農商務大臣（現在の農林水産大臣・経済産業大臣）を務めた金子堅太郎や曾禰荒助（そねあらすけ）などと精通していたことが推察される。

龍介の業績として、まず中島の「耕地整理」をあげることができる。「耕地整理」は鶴田勝蔵が中心的に活動した。しかし、なぜ1900（明治33）年に耕地整理法が公布されると、翌年すぐに中島で取り組めたかという点、この龍介が当時の伊藤博文内閣の金子堅太郎農商務大臣と協力して耕地整理の奨励に取り組んでいたことがその要因であった。これは龍介がアメリカで見た農業事情に大きく影響されたと考えられる。それを、中央政府とのつながりの中で、地元の中島の農業振興へと生かしたと考えられる。この耕地整理については、八幡社にある記念碑が龍介の業績の詳細を物語っている。次に、「高橋用水の改修」に尽力したこともその業績としてあげられる。1883（明治16）年に中島が灌漑区域に編入され、1908（明治41）年から1911年にかけて、矢作川の取水口が大改修され、灌漑面積が広がった。これらの事にも龍介がかかわっていたと考えられる。このような龍介の先進的な「耕地整理」、「高橋用水の改修」は、悠紀斎田として中島が選定される要件を備えることとなった。また、中央の農商務省と密接に関係していたと考えられるので、悠紀斎田を選定する上で自分の地元である中島を、農業先進地区として強く推薦できたのではないと思われる。このような、地元を大切にする龍介の働き等により、悠紀斎田に中島が選定されたと考えられ、その偉大さを知ることができる。1915（大正4）年の悠紀斎田お田植え祭りのときは、龍介は衆議院議員でありながら、村人の希望で六ツ美村長を兼務していた。彼は八幡社境内に斎田事務所を寄付して、率先して指導監督に当たり、見事、献穀供納の大任を果たした。お田植え唄2番の作詞者であり多方面から六ツ美のために尽力していたことが分かる。六ツ美村誌にその記載がある。

- 1872（明治05）年2月 第二大區第三小區長
- 1879（明治12）年5月 県会議員に当選
- 1881（明治14）年1月 県会議員に当選
- 1884（明治17）年5月 県会議員に当選
- 1881（明治23）年4月 県会議員に当選

1890（明治23）年7月	第一回衆議院議員に当選
1892（明治25）年2月	第二回衆議院議員に当選
1894（明治27）年9月	第四回衆議院議員に当選
1898（明治31）年7月	第六回衆議院議員に当選
1902（明治35）年8月	第八回衆議院議員に当選
1903（明治36）年3月	第九回衆議院議員に当選
1908（明治41）年5月	第十回衆議院議員に当選
1912（明治45）年5月	第十一回衆議院議員に当選
1915（大正04）年3月	第十二回衆議院議員に当選
1915（大正04）年4月	六ッ美村長
1920（大正09）年5月	第十四回衆議院議員に当選



早川龍介
高橋用水記念碑
大正8年6月建立 20150726



八幡社耕地整理記念碑 明治38年建立 20150727

〔杉浦定吉（1854～1910）〕

矢作川が山で崩壊した土砂を沖積活動によって運んで、三河湾を陸地化していた時代、その左岸に大きな自然堤防を積み残した。現在の国鉄東海道線矢作川鉄橋あたりから下流へ約二キロ、現在は岡崎市に編入された旧六ッ美村の村境とほぼ一致した自然堤防である。この自然堤防は大きいもので、その上に中之郷、上・下青野、合歓木などの大集落が営まれていた。集落に付帯の畑もあるが、それよりも湿田となっている部分が多いことがこの村の特徴であった。自然堤防が滲み出す水分が冷水であったため、農作物、主として水稻がこの冷水のため害を受けることが多かった。農家はこれを「小悪水」、冷水の掛かる湿田を「水荒い（みざれ）」と呼んでいた。その原因である滲み出す水を止めることができなかった。そこで、部落で悪水を小さく集め、協力して1ヶ所へ落したのが安藤川であった。安藤川は自分で海まで流す力はなかったから、下流の江原地区を経て矢作古川へ流していた。昔の安藤川は、野川と言っていた。いつも停滞し流れがなかった。低地であった安藤部落の東側などは、沼になってカモやガンの遊び場になっていた。それを解決するためには、上流を含めて大改修が必要であった。

1882（明治15）年の水害のあと、県では、この難所を開拓するために悪水路の改修を行った。これが、安藤川第1期の改修工事であり、このときから「野川」を「安藤川」と改名した。最上流の宮地から安藤川まで約4km、一直線の排水溝の幹線を設けたが、日々滲み出る「小悪水」を完全には除去することは出来なかった。それを解決したのは1898（明治31）年になり、大改修の協定ができ、安藤川悪水普通水利組合ができたことからである。それにより、1900（明治33）年と1901年の大改修工事が可能になった。それは、矢作川の上流からの分水によって、六ッ美村の最上流宮地から暖かい用水が無限に得られ、村内広くその利益を分かちつことである。矢作川上流の暖かい水が、「悪水」を圧倒して、六ッ美の稲作を確固たる基礎に立たせたのである。それだけでなく、排水溝が貯水池に流れることによって六ッ美村を不動の二毛作（裏作の菜種）にしたのもこの力であった。1911（明治44）年にこのような大改修工事の竣工したことを、後の世に伝えるために、安藤橋のそばに記念碑を建て、工事の沿革を記し、功績者である杉浦定吉（すぎうら さだきち）をたたえた。記念碑には次のように書いてある。

「杉浦定吉、六ッ美村安藤に生る。代々農。安藤村の旧荘屋。安藤川は昔より悪水滞って疎通

せず……明治15年三島切れの大水害後、県は少しく改修すると雖も、霖雨氾濫、昔と異ならず、数年に1回僅かに収穫あるのみ。定吉悪水排除の法を主唱し、明治31年水利組合（を組織し）……一死万難を排して工事を督励して倦まず。34年竣工。37大字（あざ）にまたがり関係反別980余町歩。総工費8万1千余円。不毛の地ひるがえって良田となり、純益1万円余の年収を増加する。」

安藤川の改修によって事情は一変し、小悪水は圧倒され、稲作はじめ各種農作は一挙に成功し、六ツ美の農業は繁栄をもたらした。これによって二毛作が広く実施され「農業六ツ美」として広く賞讃されることになった。



杉浦定吉

安藤川改修記念碑
明治45年建立 20150726



安藤川改修記念碑 昭和41年建立 20150726

【加藤小兵（1854～1897）】

加藤小兵（かとう こひょう）は1854（安政元）年に、三河国吹羽良村羽角に生まれた。父を喜十といい、代々庄屋を営んでいた。加藤は西三河に古くから伝わる稲留流煙火（花火）を学び、その伝承者の一人になった。特に須美村（現、幸田町）の僧である信道の得意とした流星の技術を習得した。流星は落下する矢が危険で、明治になって打ち上げが禁止された。そもそも、煙火とは、徳川家康が稲留流砲術師範として稲留伊賀守直家を召し抱えて鉄砲鍛冶の指導に当らせたことに始まり、泰平の時代になってからは平和の煙火へと変化し稲留流火術は稲留流煙火となった。研究熱心な小兵は既存の技術だけでは飽き足らず、豊橋の仙賀佐十に師事し、仙賀流煙火の技術を吸収した。仙賀流とは明治の初めに佐十によって作りだされた流儀で、当時はまだ使われていなかった塩素酸カリウムを用いて紅や緑など彩り豊かな閃光を出す点に特長があった。

小兵はこのように稲留流と仙賀流とを土台にして研究を重ね、新たに独特の製造法を編み出し、1887（明治20）年、これを「最明流」と名付け一派を築いた。この名称は地元の古刹・最明寺にちなんでいると言われている。最明流の特長は独特の緑の閃光と、菊花状に開いた外輪と内輪の2重になる鮮やかな区別にあると言われている。加藤は招魂祭共進会等に花火を奉納し賞を受けた。そのため、最明流を学ぶ人が多くいた。



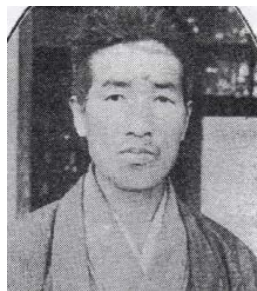
加藤小兵

しかし、残念なことに1890（明治23）年、眼の病にかかり失明した。その後、弟の鶴次郎が煙火業を継いだ。1897（明治30）年、28歳の若さで病死した。その時、門弟が集まり加藤小兵の業績を讃える碑の建立を計画し、早川龍介（国会議員）に碑文を依頼し、1901（明治34）年に羽

角（最明寺）山の中腹（最明流発祥の地）に「最明流碑」が建立された。碑文には、加藤の業績が刻まれている。加藤は1920（大正9）年、66歳で生涯を終えた。

【野本芳三郎（1861～1945）】

野本芳三郎（のもと よしさぶろう）は、1900（明治32）年4月には、若くして占部村長を務めていた記録があり、1907（明治39）六ツ美村誕生後も、第6代六ツ美村長として1915（大正4）年末から1919（大正8）年末まで4年間務めている。占部天神社の「平井要造翁頌徳碑」は、まさに彼が六ツ美村長になったときに、六ツ美村書記の渡邊富右衛門（旧占部村助役、国正）とで建立したということが碑文から分かる。それらのことから推察されることは、芳三郎が若くして平井要造の後の占部村長を務めたことを含め、芳三郎は要造から多くの指導や支援を受けていたのではないかと推察される。書記の富右衛門も同様と考えられる。ちなみに芳三郎が占部村長となったときは年齢が30歳代で、要造は60歳前後であった。



野本芳三郎

芳三郎については「碧海知名人士録」（1915（大正4）年）に、「幾多の公職を、責任を持って行い、多くの人からの信望があり、また綿密で慎重に事に当たり、見習うべき美風を持っていた。」ということが記されている。

【早川治三郎（1864～1924）】

八幡社にある「耕地整理の記念碑」の隣の碑が、早川治三郎（はやかわ じさぶろう）の碑である。1928（昭和3）年村人の求めにより早川龍介が文を書き、碑として建立したものである。治三郎の業績はまず、耕地整理事業を遂行したことがあげられる。耕地整理の実質的な仕事は事務長であった治三郎が指揮を執ったようにも感じ取れる。実際に耕地整理事業当初の県外視察から彼の名は記録に残っている。逆にその記録は治三郎が行ったものとも考えられる。龍介は治三郎の高い才能を認め、自分の最も信頼するブレインにしていたことが推察できる。耕地整理が始まった1901（明治34）年は龍介48才、治三郎37才であったので年齢的にも適当な関係であった。だからこそ龍介は突如として亡くなった彼の死を悔やんでいると思われる。



早川治三郎



八幡社 早川治三郎の碑
1928（昭和3）年建立 20150727



中島案内

次に、治三郎はお田植え祭りに配布された「中島案内」の編者として名前を見ることができる。これは中島学校長であった牧嘉丸とともにまとめている。内容は70ページほどの構成で、中島の起源に始まり、位置、面積、沿革など中島の自然、歴史、その当時の事物などが分かりやすく記載されている。この冊子から大正初期の中島の多くを知ることができる。

〔野々山卯三郎（1866～1929）〕

野々山卯三郎（ののやま うさぶろう）は、占部村において土地地区整理委員、占部学校仮校舎修繕委員および占部材村会議員などを務め、1899（明治32）年に32歳の若さで占部村長となった。その後、1906（明治39）年に六ツ美村が誕生するまで占部村長を務めていた。その間、碧海郡長の指示で耕地整理の視察として静岡県を訪れている。安藤川悪水組合委員として安藤川の改修にも尽力している。また、郡内において、農会評議員、衛生会評議員および教育会評議員などを務め、碧海郡内での要職を歴任している。

六ツ美村が誕生してからは、村会議員（40歳）、碧海郡会議員（41歳）となり、また碧海郡会副議長（43歳）も務めている。1915（大正4）年に発行された「碧海郡名士人録」には、卯三郎の記録が明記され、「徹頭徹尾、温和と実行を大切にし、農事に熱心であった。」と述べられている。1914（大正3）3月に、中島が悠紀斎田に選定され、大嘗祭悠紀斎田委員会が発足したとき、卯三郎が委員長となっている。その後、1915年4月に悠紀斎田奉賛会が発足したときには、接待部長を愛知県知事から任命されている。この奉賛会は悠紀斎田お田植え祭りの一連の活動を企画・運営した。



野々山卯三郎

〔石川成章（1872～1945）〕

石川成章（いしかわ せいしょう）は地質学者で晩年は真宗大谷派参事を務めた。愛知県碧海郡下中嶋村（現、岡崎市の中島町字本町）の浄光寺で石川嶺観の四男として生まれる。浄土真宗三河教校に学ぶ。1896（明治29）年に東京帝国大学理科大学地質学科に入学。1899（明治32）年同大学を卒業。同年、東京真宗中学校講師に就任。それからのち東京高等師範学校、陸軍中央幼年学校、早稲田大学などで教鞭をとった。



石川成章 1932年 浄光寺提供



1916年 浄光寺提供

1907（明治40）年、鉱務技師として福岡県鉱山監督局に赴く。1917（大正6）年、京都帝国大学

工学部ならびに理学部の講師を嘱託される。講師を続けるかたわら、旧制中学校の地質学の教科書を中心に多くの書物を執筆し、後進の育成に努めた。また、宗教・漢詩文の方面でも活躍した。著作の主なものとしては『鉱物界』『鉱物界教授指針』『中学鉱物界』『地文学教科書』『地球発達史』『地文学講義』『地学教程』『地文地質学要解』『宇宙の黙示』『自然の妙趣』『自然科学と仏教』などが挙げられる。京都にいる頃、1931（昭和6）年から1942（昭和17）まで京都地方裁判所調停委員を嘱託されている。晩年は郷里岡崎市の浄光寺に帰って第16世住職になり、真宗大谷派参事の職に就いた。号を簡堂といった。六ツ美村誌にその記載がある。



石川成章著書の表紙 浄光寺提供

- | | |
|----------------|------------------------------|
| 1879（明治12）年03月 | 公立中嶋學校下等8級に入學 |
| 1884（明治17）年07月 | 中嶋學校中等科1級卒業 |
| 1884（明治17）年09月 | 堀内善次郎氏につき、十八史略や文章軌範等を学び始める |
| 1885（明治18）年03月 | 寶飯郡立國府中學校に入學 |
| 1886（明治19）年10月 | 真宗三河教校（当時、岡崎康生町）に入學 |
| 1890（明治23）年09月 | 日本英語學校（当時、東京神田錦町3丁目）に入學（注） |
| 1891（明治24）年07月 | 第一高等中等校豫科第三級に入學（第一高等学校：旧制一高） |
| 1896（明治29）年07月 | 帝国大學理科學（現、東京大学）に進學 |
| 1899（明治32）年09月 | 東京真宗中學校講師、東京高等師範學校講師 |
| 1899（明治32）年10月 | 陸軍中央幼年學校講師 |
| 1903（明治36）年03月 | 早稻田大學講師 |
| 1907（明治40）年06月 | 鑛山監督所技師 |
| 1913（大正02）年06月 | 叙勲四等、授瑞褒章受章 |
| 1916（大正05）年04月 | 大谷派本願寺参事 |
| 1917（大正06）年12月 | 京都帝國大學（現、京都大学）工学部採鉱冶金学科講師 |
| 1923（大正12）年03月 | 京都帝國大學（現、京都大学）理学部地質学科講師 |

（注）日本英語學校は東京外國語學校の誤りと思われる。1885年までには東京外國語學校の英、仏、独の学科は東京大学予備門（第1高等学校）であった。

〔足立俊次郎（1875～没年不詳）〕

足立俊次郎（あだち しゅんじろう）の足立家は舊家（旧家）であり先祖は安達（足立）藤九郎盛長と言われている。足立太郎右衛門の次男として1875（明治8）年4月14日に碧海郡六ツ美村大字中島字本町に生まれた。幼いころから秀才と言われ、小学校時代には常に主席を占め文部省（当時）より受賞した。成人後は六ツ美村のために力を尽くし、区長、商工会副会長、第一回国勢調査員、氏子総代などの公職に推薦された。家業は売薬製造業で、1894（明治27）年内務省（当時）の認可を得て以来、各地の博覧会、共進会において二十数回の賞杯をうけた。1924（大正13）年碧海郡売薬業組合を設立して、その組合長を務めた。その後、廃業し、嗣子（しし）信雄のために産婦人科病院を建設した。現在は足立産婦人科医院（一宮市栄1丁目-3-4）足立昌彦（国立名古屋病院産婦人科勤務経験）



足立俊次郎

〔松村松僊（1877～1940）〕

松村松僊（まつむら しょうせん）は1877（明治10）年7月23日に東京で生まれた。本名は松村民三（または茂）といい、楼雨（おうう）、松僊（しょうせん）の呼び名は俳画の雅号である。

1890（明治23）年第1回衆議院議員選挙で当選した早川龍介（中島出身）が帝国議会開会中の東京での定泊としていた旅館が、松僊の父の経営であった。松僊は1892（明治25）年より久保田米僊（くぼた べいせん、1852～1906、日本絵日本絵画協会絵画共進会で一等褒状受賞、京都美術協会創立）を師に日本画の修行中であり、全国を遊歴し写生に努め、花鳥図や山水図の研鑽をしていた。そんな松僊に、龍介が長年宿泊する中で、親交が深まったことから「岡崎は風光明媚なところだから写生に来ませんか。」と招待し、松僊は龍介宅を訪れた。そのとき、龍介より絵画の師匠となることを依頼され、絵画の手ほどきを行い、六ツ美に住むようになった。そのため、龍介の腕は上達し、今でも中島周辺では龍介の絵も多く残っている。



松村松僊

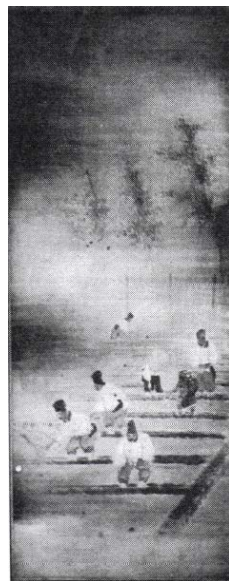


早乙女の美人画



ダルマの顔

大嘗祭 悠紀斎田 播種ノ圖



その後、1905（明治38）年12月15日、龍介宅で行儀見習いに上がっていた中島の牧野彦太郎の次女、琴（こと）と結婚し中島の住人になった。大正に入り松僊は、「大嘗祭悠紀田播種園」を描き上げた。これについて、松僊は一身の光栄、一門の誉れとして、天性の才能を発揮して取り組んだ。そして、大正天皇の天覧に供する機会を得たことで一躍有名になった。また、「悠紀斎田記念画帖」も描いた。これは悠紀斎田の一連の活動を表したもので、増刷され、多くの関係者に配付された。このように有名になったためか贋作も出回るようになり、自身の雅号を「楼雨」から「松僊」へ改めた。

この間、琴の父彦太郎の援助により、西尾軽便鉄道中島駅前に家を建て、松僊は画業、琴は呉服商を営んだ。松僊は、1940（昭和15）年6月7日に東京市目黒区で63歳の生涯を終えた。墓は中島

の崇福寺にある。

〔加藤長之助（1887～1942）〕

加藤長之助（かとう ちょうのすけ）は加藤小兵の長男で、最明流煙火の2代目を継いだ。1910（明治43）年、火薬類の取り扱いが許可制となり、長之助は全国の煙火業者に先駆け、「火薬類（煙火）製造主任」の第一号登録者となる。長之助は打ち上げ花火の名人といわれた。大正初期に結成された西三河煙火組合を核として、東三河を含めた三河煙火組合が編成され、長之助はその組合長に推された。1923（大正12）年に愛知県煙火組合が発足すると、その初代組合長にもなった。

長之助の弟・加藤喜平は、兄に劣らない技術を持ち、1926（昭和元）年蒲郡で創業し、1953（昭和23）年加藤煙火株式会社を設立。喜平は打ち上げ花火の名手であったが、玩具花火の製造にも力を注いだ。1948（昭和23）年頃にはパラシュート花火の製造も始めた。1960（昭和35）に周辺の市街地化に伴い、工場を蒲郡市から幸田町に移転した。

長之助の長男である保は上羽角町で加藤煙火製造所を経営し、玩具花火を製造した。工場が新幹線沿線の為、危険防止ということで打ち上げ花火の製造を中止し、現在では工場を閉鎖している。



加藤長之助

〔鋤柄正平（1893～没年不詳）〕

鋤柄正平は1893（明治26）年1月20日に六ツ美村大字中島字上町に生まれた。私立愛知薬学校（現、名古屋市立大学薬学部、名古屋薬科大学）を卒業後、1916（大正5）年4月上京して、東京帝国大学（現、東京大学）薬学科選科に入学し薬学を専攻した。卒業後、東京市淀橋區下落合（現、東京都新宿区の西部に位置する）に店舗を構えた。これは、医薬分業法が制定されるのを見越してのことである。後に、淀橋區会議員、商工大臣認可山之手薬粧組合理事として活躍した。

（注）医薬分業として、1889（明治22）年に、薬品営業並薬品取扱規則（薬律）が公布され、「薬舗」は薬局、「薬舗主」は薬剤師と定義された。しかし、この規制は特例で医師の調剤を認めたため形骸化された。



鋤柄正平

本項は以下の資料から引用した。

〔六ツ美村誌〕

編者 六ツ美村是調査会

発行 六ツ美村是調査会
発行日 1926（大正 15）年 12 月 1 日
発行所 日新堂書店
印刷所 活版印刷所

[愛知県碧海郡誌]

発行所：（株）千秋社
印刷所：図書印刷（株）
発行日：2000（平成12）年6月15日
原著： 参河國碧海郡誌
発行者：碧海郡教育會
印刷所：江戸川印刷（株）
発行日：1916（大正5）年10月15日

[岡崎の人物史]

著者： 岩月 栄治
編集： 岡崎の人物史編集委員会
発行日：1979（昭和 54）年 1 月 5 日
印刷所：研文印刷社
「板倉勝重」（P89）、「野本新十郎・渡邊弥蔵」（P99）、「早川龍介」（P150）、「鶴田勝蔵」（P190）、「太田功平」（P192、土井町）、「石川成章」（P249）の記述がある。

[六ツ美南部の歴史・文化を紐解く]

著者 岡崎市立六ツ美南部小学校 高須 亮平
発行日 2012（平成 24）年 3 月 31 日 初版発行
印刷所 ブラザー印刷株式会社

[わたしたちのふるさと 六ツ南 114 選]

監修者 総代会長 平井 良美
社教委員長 近藤 武美
著者 岡崎市立六ツ美南部小学校 6 年児童 114 名
（平成 25 年 3 月 19 日卒業）
編者 岡崎市立六ツ美南部小学校 6 年担任
権田 康成、加納 隆、坂井 純、榊原 美佐子、山本 佳愛
発行日 2013（平成 25）年 3 月 1 日 初版発行
印刷所 ブラザー印刷株式会社
製本 ブラザー印刷株式会社
発行 岡崎市立六ツ美南部小学校

[石川成章記念集]（非売品）

編者・発行者：伊藤信義
発行所：伊藤病院（大阪市旭区新森 2 丁目 24 番 20 号）
発行日：1980（昭和 55）年 7 月 22 日
印刷・製本：（株）洋洋堂
浄光寺について詳しく記載されている。石川成章の家族が出版。

[三河知名人士縁]

編者・発行者：久米康裕
発行所：尾三郷土史料調査会
発行日：1939（昭和 14）年 10 月 21 日
印刷：小林印刷所
鋤柄正平、足立俊次郎、石川成章などの記載がある。